

白花の朝顔

泉鏡花

青空文庫

「あんた、居やりますか。」

……唄にもある——おもしろいのは二十はたちを越えて、二十二のころ三のころ——あいにくこの篇の著者に、経験が、いや端的に体験といおう、……体験がないから、そのおもしろいのは、女か、男か。勿論誰たれに聞かしても、この唄は、女性の心意気に相違ないらしいが、どんなのを対手あいてにした人情のあらわし方だか、男勝手にはちよつときめにくい。ただしどう割引をした処で、二十三は女盛り……近ごろではいつそ娘盛りといつて可いい。しかも著者なかま、私の友だち、境辻三によつて話された、この年ごろの女というのは、祇園ぎおんの名妓めいぎだそうである。

名妓？ いかなるもので、と問われると、浅学不通、その上に、しかるべき御祝儀を並べたことのない私には、新橋、柳橋……いづくにも、これといつて容式をお目に掛ける知ち己かづきがない。遠いが花の香と諺ことわざにもいう、東京の山の手で、祇園の面影を写すのであるから、名妓は、名妓として、差支えないであろう。

また、何がゆえに、浅学不通まで打ちまけて、こんな前書をするかといえは、実はその京言葉である。すなわち、読みはじめに記した「あんた、いやはりますか。」——は、どう聞いても、祇園の芸妓、二十二、三の、すらりと婀娜な別嬪のようなじゃあない。おのぼりさんが出会った旅宿万年屋でござる。女中か、せいぜいで——いまはあるか、どうか知らぬ、二軒茶屋で豆腐を切る姉さんぐらいにしか聞えない。嫋音、嬌声、真

ならず。境辻三……巡礼が途に惑つたような名の男の口から、直接に聞いた時でさえ、例の鶯の初音などは沙汰の限りであるから、私が真似ると木菟に化ける。第一「あんた、居やはりますか。」さて、思うに、「あの、居なはるか。」とおとずれたのだから、それさへ的確ではないのだそうであるから、構わず、関東の地声でもって遣つける。

谷の戸ではない、格子戸を開けたときの、前記の声が「こんちは、あの……居らつしゃいますか。」と、ざつとかわるのであることを、諸賢に御領承を願っておいて……

わが、辻三がこの声を聞いたのは、麴町——番町も土手下り、湿けた崖下の窪地の寒々とした処であった。三月のはじめ、永い日も、午から雨もよいの、曇り空で、長屋建の平屋には、しかも夕暮が軒に近い。窓下の襖際で膳の上の銚子もなしに——もう時節で、塩のふいた鮭の切身を、鱧の肌の白さにはかなみつつ、辻三が……

というものは、ついその三四日以前まで、ふとした事から、天狗に攫われた小坊主同然、しかし丈高く、面赤き山伏という処を、色白にして眉の優い、役者のある女形に誘われて、京へ飛んだ。初のぼりだのに、宇治も瀬田も聞いたばかり。三十三間堂、金閣寺、両本願寺の屋根も見ず知らず、五条、三条も分らずに、およそ六日ばかりの間というもの、鴨川の花の廓に、酒の名も、菊、桜。白鶴、富久娘の膏を湛えた、友染の袖の池に、錦の帯の八橋を、転げた上で泳ぐがごとき、大それた溺れよう。肝魂も泥亀が、真鯉、緋鯉と雑魚寝とを知って、京女の肌を視て帰って、ぼんやりとして、まだその夢の覚めぬ折から。……

無理もない、冷飯に添えた塩鮭をはかなむのは。……時に、膳の上に、もう一品、惣菜の豆の煮たやつ。……女難にだけは安心な男にも、不思議に女房は実意があるから、これはそこらの、あやしげな煮豆屋が、あんぺらの煮出しを使った悪甘いのではない。砂糖を奢って、とろりと煮込んで、せつせと煽いで、つやみを見せた深切な処を、酔覚の舌の尖に甘く染まして、壁にうつる影法師も冷たそうに縮んだ処へ。

ころころと格子が開いた。取次の女中へ何かいう、浅間な住居で、手に取るような、その「あんたはん、居やりますか。」訳して、「ごんちは、あの、居らっしゃいますか。」

のそれだったのだそうである。

二

「京の祇園と、番町の土手下——いや、もうちつと——半道ばかり近いのです。大勢の中で、その芸妓——お絹というんです——その女が、京都駅まで、九時何十分かの急行を見送りに来てくれたんだから。……それにしても少々遠過ぎますね。——声を聞いて、すぐそのお絹だ、と思つたのは。

しかし事実なんです。

(やあ、これは珍客。)

とか、大きな声して、いきなり、箸をおくと、件の煮豆を一つ、膳の上へ転がしながら、いきなり立上つて中縁のような板敷へ出ましたから。……鴨が南天燭の実、山雀が胡桃ですか、いつそ鶯が梅の蕾をこぼしたのなら知らない事——草稿持込で食っている人間が煮豆を転がす様子では、色恋の沙汰ではありません。——それなのに……」

境辻三は、串戯ではなさそうに、真顔になつていったのである——

「しかし、またあらためて、お絹のその麗うつくしさというものは。——（お危うございます、ここは暗いんでございますから。）おいそれものの女中めが、のつけのその京言葉と、朱と鷺色きいろの手絡てがら、艶つやつや々つやつやした円まるまげ鬘まげ、藤紫とうむらさきに薄うすねずみ鼠ねずみのかかった小袖つまの褻つまへ、青柳をしつとりと、色の蝶ちょうが緑を透といて、抜ぬけて、ひらひらと胸へ肩へ、舞立まじつたような飛模とび様さまを、すらりと着きこなした、長襦ながじゆばん袷あはせは緋ひに総染そうぞめの小桜こざくらで、ちらちらと土間へ来た容ようす子を一目、京都から帰かえつたばかりの主人あるじが旅たびさきの知ち己かづき、てつきり溶とろけるものと合あ点てんして、有無あつちを部屋へ聞きかないさきから、すぐこうお通りはいいのですが、口上くちやうが癩しかくですよ。（真暗まっくらですから。）が、仕方がない、押付おつけ仕事の安普請やすびしやうで、間取りに無理無理がありますから、玄関げんかんの次つぎが暗いのです。いきなり手を曳ひいて連れ込んだ、そのひき方がそつかし屋やで荒いので、私わたしと顔を会あわせた時は、よろけ加減かげんで、お絹の顔かほが、ほんのりとなつて、その長襦ながじゆばん袷あはせのしなやかな裳すそをこぼれた姿すがたは、脊せきは高たかし、天井てんけいの黒い雲くもから糸桜いとざくらがすらすらと枝垂しだれたよう

で、いや、どうも……祇園ぎんの空そらから降ふつて来たかと思おもわれました。

——時に、重ねていうようですが、三月さんげつのはじめです。三月さんげつといえは弥生やよいです。桜さくらは季節きせつでありますけれども、まだどこにも咲さいてはいません。ところが、どうした事ことか、これから、宵よ、夜よる、夜中よるなかに掛かけて、話わを運びます、春木町はるきまちの、その頃ころの本郷座ほんきやうざ。上野うさのの山内さんない、

清水きよみずの観音堂。鶯うぐいす谷たにという順に、その到る処、花が咲いていたように思います。唯ただ今いまも、目に見えて、桜に包まれるようですが、実は、こんな事は、今まで、誰にも片端しやべも饒舌しやべつたことはありませんから、いつも一人で、咲満ちた花の中にいた気だったのですけれども、あなたに。」

著者に、いうのである。

「三月、と口にしますと同時に、ふと気がつく、彼岸ずつと前で、まだ桜は咲きません。が、それからお絹を連れて行きました、本郷座の芝居が、ちょうど祇園の夜桜、舞台一面の処へぶつかりましたし、続いて上野でも、鶯谷でも、特に観世音の御堂みどうでは、この妓おんなと、花片はなびらが颯さつと微醉ほろよひの頬に当るように、淡い薰うすかおりさえして、近々と、膝を突合させたような事がありましたから、色の刺激で、欄干こすえ近い、枝も梢こすえも、ほの紅あかかつたのだらうと思われ
ます。

ところで——芝居ゆき行です。が、どの道、糸錦の帯で押立よく、羽織はなしに居ゐずまいも端正きんちんとしたのを、仕事場の机のわきへ据えた処で、……おなじ年ごろの家内が、糠味ぬかみそ噉そじりの、襷たすきをはずして、渋茶を振舞つてみた処で、近所の鮓すしを取った処で、てんぷら蕎麦そばにした処で、びん長ながまぐろ 鮪さしみの魚軒ぎょけんごときで一銚子いちやうしといった処で、京から降つて来た別嬪べつぴん

の撰待せつたいらしくはありません。京では、瓢亭ひょうていだの、西石垣さいせきのちもとだのと、この妓ひとが案内あんないをしてくれたのに対しても、山谷さんや、浜町はまちやう、しかるべき料理屋へ、晩のご飯ふくごうという懐中はその時分なし、今もなし、は、は、は、笑つたつて、ごまかせない。

(おつれば?)

ただ一人で訪ねて来て、目の前に斜ななめに坐すわつてゐる極彩色に、連つれを聞いたも変ですが、先さき方の稼業きぎが稼業ですから。……なぞといつて、まじくないながら、とつおいつのうち、お絹きぬが、四五人で客に連れられて来たのだけれど、いまは旅館に一人で残つた……

(早う、あんたはんの許とこへ来とうて、来とうてな。)

いよいよ、天麩羅てんぷらでは納まらない。思いついたのが芝居です。

で、本郷に出ているのは、箕原路之助みはらみちのすけ——この友だちが、つい前日まで、祇園で一所いだったので、四条の芝居を打上げた一座が、帰つて来て、弥生興行の最中だと思ひ下さい。

(……すぐ出掛けましょう、御婦人には芝居と南瓜とうなすが何よりの御馳走ごちそうだ。)

馬鹿も通越した、自棄やけな言句もんくを切出して、

(……) 鼻貞ひいぎの路之助みちのすけが出ています。)

役者を鼻肩とさえいつておけば間違いはないものの——その実、祇園にいたうちに、五人、八人、時には十人にも余つて、その六日ばかりの間、時々出入り交代はあつても、ほとんど同じ顔の芸妓舞子が、寝る、起きる、飲む、唄う。十一時ごろに芝居のはねるのを宵の口にして、あけ方の三時四時まで続くんでしよう。雑魚寝の女護の島で、宿酔の海豹が恍惚と薄目を開けると、友染を着た鶯のような舞子が二三羽ひらひらと舞込んで、眉を撫でる、鼻を掴む、花簪で頭髮を搔く、と、ふわりと胸へ乗つて、搔巻の天鷲絨の襟へ、笹色の唇を持つて行くのがある。……いいえ、その路之助のですよ。女形の。……しかも同じ衾の左右には、まくれたり、はだかつたり、白い肌が濡れた羽衣に包まれたようになって、紅の閨の寝息が、すやすやと、春風の小枕に小波を寄せている。私はただ屏風の巖に、一介の榮螺のごとく、孤影然として独り蓋を堅くしていた。とにかくです、昼夜とも、その連中に、いまだかつて、顔を見せなかつたのが、お絹なんです。

——晩には、東京へ帰ろうとする朝でした。旅馴れないので、何となく心が急ぎます。早めに起きた右の榮螺が、そつと蓋をあけて、恐る恐る朝日に映る寝乱れた浮世絵を覗きながら、二階を下りて、廊下を用たしに行く途中、一段高く、下へ水は流れませんが、植

込の冷い中に、さらさらと笄かけひの音がして、橋はしづくりくりに渡りを架けた処かがあった。

そこに、女中……いや、中でも容色きりようよしの仲居にも、ついで見掛けたことのないのが、むぞうさな束髪たばねがみで、襟脚たもとがくつきり白い。大島緋おおしまがすりに縮緬しまちりめんの羽織を着たのが、両袖を胸に合せ、橋際の柱むたに凭もたれて、後姿で寂しそうに立っている。横顔をちらりと視みて通る時、東山の方から松風が吹込んだように思いました。——これが、お絹だったのです。あとで聞くと、病気で休んでいて、それまでの座敷へは出なかつた。髪を洗ったのもやつと昨日きのうで、珍らしい東の客が、今日帰る、と聞いたので、急いで来たが、まだ皆夜中らしいから、遠慮をしていたのだというのが分りました。けれども、顔を洗って、戻るのは、まだおなじところに、おなじ姿を見ると、ちよつと二間ばかりの橋が、急にすらすらと長く伸びて、宇治か、瀬田か、昔話の長橋の真中まんなかにただ一人怪しい婦人おんなが、霞たすに亘たんだようですから、気をはつきりと、欄干を伝うところを、

(目々、覚めてどすか。)

と清すずしい目で、ちよつと見迎えて、莞爾にっこりしたではありませんか。私は冷ひやりりとしました。第一、目々が覚めたという柄しずかじやない、洗つつて来い、という面つらです。

閑静しずかだから、こつちへ——と行って、さも待設けてでもいたように、……疏水そすいですか、

あの川が窓下をすぐに通る、離座敷へ案内をすると、蒲団ふとんを敷かせる。乗ったんですが、何だか手玉に取られた形で、腰が浮くと、矢の流れで危いくらい。が、きつぱりと目の覚めた処で、お手ずから、朝茶を下さる。

(姉さんは、娘いとはんですか、此楼こちうの……)

いやな野郎で、聞覚えの京言葉を、茶の子でなしに嘔かじりましたが、娘か、と思ったほど、人まがらが勝まっている。……

通力自在、膳はいせんも盃なまゆば洗はもすぐ出る処へ、路之助が、きちんと着換えて入って来て、鍋なべのものも、名物の生湯葉なまゆば沢山に、例の水菜、はんぺんのあつさりした水煮で、人まぜもせず、お絹いとが——お酌。

(ずツと見物をおしやしたか。)

宇治は、嵯峨さがは。——いや、いや、南禅寺から將軍塚を山づたいに、児ヶ淵ちごふちを抜けて、音羽山清水きよみずへ、お参りをしたばかりだ、というと、まるで、御詠歌はんどすな、ほ、ほ、ほ、と笑う。

路之助が、

(その癖、お絹さん、お前さんの好きそうな処ばかりだぜ。……境さん——この人は、まだ休んでいて隙ひまですから、そこいら、御案内をしようというのですが、どうかすると、神社仏閣、同行どうぎょう二人の形になりかねませんよ。)

(巡礼結構。同行二人なら野宿でもかまいません。)

(ほ、ほ、ほ、よういわんわ。)

御免下さい。……だから言わないことではない。もうこの辺の、語義の活法おぼつかが覺束おぼつかない。

が、串じょうだん戲ぎではありません、容色きりよう、風采とりなりこの人に向って、つい(巡礼結構)とい

つた下に、思わず胸のせまることであつたのです。——

ですから、嗟な峨なへ、宇治へというのを断ことわつて、朝出ると、すぐ三十三間堂さんじゅうさんかんだう。社やしろもうで、寺てらまいり。何なににしろ食たつたものさえ、水菜と湯葉たげです。あの、鍋なべからさらさらと立つた湯気かきも、如月きさらぎの水を渡る朝風あそかぜが誘なつたので、霜しもが靡なびいたように見えた、精進腹しやうじんはら、清浄しやうじやうなものでしよう。北野のお宮みや。壬生みぶの地藏ぢざう。尊たうかつたり、寂さびしかつたり。途中ちゆうちゆうは新地しんちの赤い格子こし、青い暖簾のれん、どこかの盛場の店飾みせかざりも、活動写真の看板かんばんも、よくは見ません。菜な畠はたけに近い場末ばつまつの辻つじの日溜ひだまりに、柳やなぎの下で、鮎ふなを売うる桶おけを二人で覗のぞいて、

(みんな、目あいていやはるな。)

といった、お絹の目が鯉こいの目より濡ぬれぬれ々としたのが記憶にある……といった見物で。――
――帰途かえりは、薄暮くれがたを、もみじより、花より、ただ落葉を鴨川へ渡したような――団栗橋どんぐりばし
――というのを渡つて、もう一度清水へ上つたのです。まだ電燈にはならない時分、廻廊の燈籠とうろうの白い蓮華れんげの聯つらなつたような薄あかりで、舞台に立った、二人の影法師も霞んで高い。……

暗い磴いしだぶすかの幽ゆすかな底に、音羽の滝の音を聞いた時は、

松風に音羽の滝の清水を

むすぶ心やすずしかるらん

地唄の三味線は、耳に消えて、御詠歌の声をさながらに聞きますと――はてな、なぜか今朝、起きぬけに、祇園の茶屋の橋がかりで笈かけひの音のした時と、お絹の姿も同じようで、一日を夢に見たように思いましたが――

――更に、日もおかず、お絹が土手番町へ訪ねて来た、しかもその夜、上野の清水きよみずの御堂みどうの舞台に、おなじように、二人で立つ事になったんです――

音羽のその時は、風情がいいから、もう一度、団栗橋を渡り返した、京洛らくちゆう中と東山にはさまって、何だか、私どもは小さな人形同然、笹舟ささふねじゃあない、木の実のくりぬきに乗って、流れついた気がします——

そうですよ、宿は西石垣さいせきのなにかし屋に取ってあつたのですが、宿では驚いていたでしょう。路之助の馳走になりつづけで、おのぼりの身は藻抜の殻で、座敷に預けたのが、擬ま更紗がいさらの旅袋たつた一つ。

しわす、晦つごもりの雪の夜に、情なさけの宿を参らせた、貧家の衾ふすまむしろの筵むしろの中に、旅僧が小判になつていたのじゃない。魔法妖術まほうようじゆつをつかうか知らん、お客が蝦蟆がまに変じた形で、ひよこんと床間とこのまに乗っている。

お絹が引添つての、心づけでは、電話で、もう路之助から、ここの勘定は済んでいる。まだ、それよりも、お恥かしいやら、おかしいのは……

(——お絹さん、その手提袋ですがね、中味が緊張しておりません、張合のないせいとか、紐ひもが自おのから、だらりとして、下駄のさきとすれすれに袋が伸びていたそうで。京都へ着いた時迎いに来てくれましたよ、路之助の番頭と一所だった年増けいしやの芸妓げいしやが、追って酒宴の時、意見をしてくれましたよ。あれは見つともない、先陣の源太はんやないけど、腹帯ゆるが弛ゆる

だように見える……といつてね。」

（ほんに、私も、東の方鼻眞どす……しつかりとあんじょうに……）

——細い指であやつつて、あ、着換を畳もう、という、待遇振。ですが、何にもない。着のみ、着のまままで、しやんと結ばると袋はペしやんこ。そいつを袖で抱いて、さ、晩のご飯を近所のちもとへ、と立たれたのには、懐中もペしやんこです。

これも路之助の心づけで、ちやんと席を取つて支度が出来ていて、さしむかいで、酒になつた処へ、芝居から使の番頭、姓氏あり。津山彦兵衛とちよつとお覚え下さい。

（——すぐ、あとで、本郷座の前茶屋へ顔を出しますから——）

花柳界の総見で、楽屋は混雑の最中、おいでを願つてはかえつて失礼。お送りをいたすはずですが、ちようど舞台になりますから。……縞の羽織、前垂掛だが、折目正しい口上で、土産に京人形の綺麗な島田と、木菟の茶羽の練もの……大鼻眞の鳥で望んだのですが、この時は少々擦つたかつた。やがて、その京人形に、停車場まで送られて、木菟が。

……夜汽車で飛ぶ。」……

「いらつしやいまし、ようこそ。——路之助も一度お伺い申したいと、いいいい、帰京早々けいこ稽古にかかつて、すぐに、開けたものでございますから、つい失礼を。……今日こんにちはまたどうも難ありがと有う存じます。」

「御挨拶ごあいさつで恐縮ですよ。津山さん。私こそ、京都で、あんなにお世話になって。——すぐにもお礼かたがたお訪ね申さなければならなかつたのですが、ご存じの、貧乏稼ぎにかまけましてね。」

「なぞとおつしやる。……は、は、は。」

と笑いを手で蓋ふたして、軽く咳せきした。小肥こぶとりにがっしりした年配が、稼業で人をそらさない。

「まったくですよ。ところでですね。ぶちまけた話ですが、万事、ちつとでも、楽屋の方で御心配を下さらないように——実は売場で切符を買つてと思いましたがね。」

「そんな水臭いことを……ご串じょうだん戯でで。」

「いや、ご馳走は、ご馳走。見物は見物です。実は、この京人形。」

お絹が上品な円鬚まるまげで、紫仕立の柳褌やなぎづま、茶屋の蒲団に、据えたようにいるのです。

「たしか、今度の二番目の外題も、京人形。」

「序幕が開いた処でございまして、お土産興行、といった心持でござんしてな。」

「そのお土産をね、津山さん、……本箱の上へ飾つてある処へ……でしょう。……不意でしよう。まるで動いて出たようでしょう。並んでいる木菟みみずくにも、ふらふらと魂が入つたから、飛ばたいて飛出したと——お大尽だいじんづきあいは馴れていなさるだろうから、一つ、切符で見ようじゃありませんか、という、……嬉しい、といって賛成は、まことに嬉しい。当方立たちどころ処ふところに懐中ふところが大きくなつた。」

「は、は、は。」

と蓋ふたして、軽く笑う。津山の懐中ふところの方が余程大きい。

「木戸へ差しかかると満員、全部売切れ申候だから、とにかく、連中で来て、一二度知つてるので、こちらに世話を掛けたんですが、つれがつれです、快よくあしらつてはくれませんでしたけれども、何分にも、ぎつしりで、席は一つもないというんで、止やむを得ず……悪く思わないで下さい……まったく止むを得ず、茶屋から、楽屋へ声を掛けてもらったんですから。しかし、大入で、何より結構。」

「お庇かけま様で、ここん処、ずっと売切つております。いえ、お場所は出来ます。いえ、決

して無理はいたしません。そのかわり、他様と入込みで、ご不承を願うかも知れません。今日の処は、ほんの場の景気をお慰みだけ、芝居は更めてお見直しを願います。……つきましては、いずれ楽屋へもお供をいたしますが、そのおつれ様……その、京人形様。——は、は、は——の処は、何にもおつしやらず、ご内分に。——いえ、あなた様のおつれでございませうから、仔細はないのでございませうがな、この役者なかと申しますものは、何かとそのつきあいがまた……煩いのでして、……京から芸妓はんが路之助を追駈けて逢いに来たわ、それ蕎麦だ……などと申すわけで、そうでもないのに、何かと物騒、は、は、は。」

両三度、津山の笑いは、ここで笑うのにあらかじめ用意をしたらしいほど、式のごとく、例の口許をおさえて、黙然を暗示しながら、目でおどけた。

「……は、は、は、と申すわけで。お含みを。——ああ、八さん、お茶を入れかえて……そう、宜しい。何、ぼくにか、はて、忙しい。は、は、は。いやいずれ今ほど。——お場所が出来ましたそうでございませうから。」

膝で這つて、津山が立つのと入交つて、男衆が階子段の口でお辞儀をして、「では、ご見物を。」

「心得た。」

見ますとね、下の店前に、八角の大火鉢を、ぐるりと人間の巖のごとく取巻いて、
大髻の相撲連中九人ばかり、峰を聳て、谷を展いて、湯吞で煽り、片口、井、谷川の
流れるように飲んでゐる。……何しろ取込んで忙しそうだ、早いに限ると、外套を脱い
だ身軽です。いきなり下りると、

「へい、行つてらっしゃいます。」

帳場で女の声でしたかしないに、

「危い！」

わつと響くのが一斉で、相撲が四五人どつと立った。いずれも大ものですから、屋鳴
り震動の中に、幽に、トンと心細い音が、と見ると、お絹のその姿が階子段の上から真
横になつて、くるくるトトトン、棲がぼつと乱れて、白い脛、いや、祇園での踊手だと聞
く、舞で鍛えた身は軽い、さそくの躰みで前棲を踏みぐくめた雪なす爪先が、死んだ
蝶のように落ちかかつて、帯の糸錦が葉玉に翻ると、溢れた襦袢の緋桜の、細
な鱗のごとく流れるのが、さながら、凄艶な白蛇の化身の、血に剥がれてのた打つ状
して、ほとんど無意識に両手を拡げた、私の袖へ、うつくしい首が仰向けになつて胸へ入

り、櫛くしこうがい 笄がきがきらりとして、前髪よりは、眉まゆが芬ぶんと匂うんです。そのまま私の首筋に、袖口が熱くかかったなり、抱き据えて、腰をたてにしたまで、すべて、息を吐く隙ひまがない。息を吐く隙ひまがありません。

土俵くすが壊れたような、相撲の総立ちに、茶屋の表も幟のぼりを黒くした群衆でしょう。雪は降りかかって来ませんが、お七やぐらが櫓さかさまから倒たに落ちたも同然、恐らく本郷はじまって以来、前代未聞の珍事です。

あまりの事に、寂然しんとする、その人立の中を、どう替草履ひっかを引掛けたか覚えていません。夢中で、はすに木戸口へ突切りつつきました。お絹は、それでも、帯も襟もくずさない。おくれ毛を、掛けたばかりで、櫛くしもきちんと挿さっていました。背負しよい上げの結び目が、まだなまなまと血のように片端垂さがつて、踏みしめて裙すそを庇かばつた上前の片棲かたづまが、ずるずると地を曳ひいている。

抱かかいて通つたのか、絡もつれて飛んだのか、まるで現うつつで、ぐたりと肩かたに凭よつかかつたまま、そうでしょう……引息ほっを吻くちと深く、木戸口で、

「ああ、お婿はん。」……

と泣くようにいった。生死しやれの最中、洒落しやれどころではないのですが、これは京都で、連中

が、女形の客だというので（お婿はん、お婿はん。）と私を、からかったのが、つい出ました。

「……わて、もう、死ぬるか思うた。」

と、目が澄んで、熟と視て、颯と顔色が蒼ざめたんです。

「あんたはんに恥を掻かせた、済まんなあ、……生命の親え。」

「……………」

「二階を下りしなに、何や暗うなつて、ふらふらと目がもうて、……まあ、私、ほんに、あの中へ落ちた事なら手足が断れる。」

という声も、小刻みで東へ廻る。茶屋の男は木戸口に待っていたが、この上極りを悪がらせまい用心で、見舞もいわない、知らん顔で……そろそろついて来た表口の人ばかりを、たツつけを穿いた男が二人、手を挙げて留めているのが見えました。

そツと屈んで、

「へい、こちらへ。」——

土間、棧敷、二、三階、ぎつしり一杯。成程、やっと都合がついたのだと見えて、四人詰めに、上下大島づくめなのと、背広の服のと、しかるべき紳士が二人いましたが、これ

が、そのまま、腰に瓢箪ひょうたんでもつけていそうな、暖簾のれんも、景気燈けいきあかりも、お花見気分、紅あかい霽もやが場内一面。舞台は、切組、描割で引包んだ祇園の景色。で、この間、枝ぶりを返つたばかりの名木の車輪桜が、影の映るまで満開です。おかしい事には、芸妓げいしや、舞妓まいこ、幫間ぼうかんまじり、きらびやかな取巻きで、洋服の紳士が、桜を一枝——あれは、あの枝は折らせまい、形容でしょう。——もう一人、富豪——成金らしい大島揃ぞろいが、瓢箪をさげている。

一つ棧敷——東のずつと末でした——その妙に、同じような先客が、ふと気がさしたと見えて——挨拶をした時は、ふり向きもしなかったのが——お絹をこの時見返つて、愕がくぜ然んとした様子です。……

ところで、何でも、その桜の枝と、瓢箪が、幫間の手に渡るのをきっかけに、おのおの賑にぎやかなすて台辞せりふで、しも手ですか、向つて右へ入ると、満場ただ祇園の桜。

花咲かば告げ　　むといいし山寺の……

この合方は、あらゆる浄瑠璃、勝手次第という処を、囃子はやしに合わせて謡が聞える。

使は来たり馬　　に鞍、鞍馬の山のうず桜……

「牛若の仮装でも出ますかね、私は大の鼯あか履あかです。」

恥ずべし、恥ずべし。……式亭三馬嘲る処の、聾棧敷のとんちきを頭わすと、

「路之助はんが、出やはるやろ。」

お絹の方が知っている。ただしこの様子では、胸も痛めず、怪我はしない。

しやり、り、揚幕。艶麗にあらわれた、大どよみの掛声に路之助扮した処の京の芸妓

が、襟裏のあかいがやや露呈なばかり、髪容着つけ万端。無論友染の緋桜縮緬。

思いなしか、顔のこしらえまで、——傍にならんだのとそっくりなのに、聾棧敷一驚を吃

する処に、一度姿を消した舞妓が一人、小走りに駆け戻ると、花道の、七三とかいうあ

たりで、ひつたり出会う。何でもお客が大変待あぐんで機嫌が悪い、急いで迎いに、とい

うのです。

路之助の姉芸妓が、おおしんど、か何かで、肩へ色気を見せたのですが、

「えろう遅うなって、ご苦労え、あのな、ついそこで、いえ、あのな、むこうへ、……境

はん。」

おや。

「あんたも知ってやろ。境はんが来やはって、逢いとう逢いとうていた処やろ、それやよ

って。」

とこつちを視て莞爾。にっこり。——

「いやや、驕おごんなはれ。」

と舞妓がいれかわ入交つて、トンと揚幕の方から路之助の脊筋をたた敲いた。

「おお、晴がまし。」

お絹が、階子段を転げた時から、片手に持つていた、水のように薄色の藤紫の肩掛ショオルを、俯向うつむいた頬へ当てたのです。

——舞台、舞台ですか……

舞台どころじゃありません。その時うしろの戸が、悪く、静かに開いたと思うと、この、私の背中を、トンと、誰か、ぐにやりとした手で敲いたんですから。

いま、戸が開いたと思うと同時に、可厭いやな気味合の冷アい風が、すうと廊下から入つて、ちり毛もとに、ぞつと沁しみたまも道理こそ、十九貫と渾名あだなを取る……かねて借金があつて、抜くけつ潜りつ、すつぽかしている——でぶでぶした、ある、その、安待合の女房が、餡あんこ子入いりの大廂髪おおひさしで、その頃はやつた消炭色けしずみいろ紋付の羽織えもんの衣紋えもんを抜いたのが、目のふちに、ちかちかと青黒い筋の畳まるまで、むら兀はげのした濃い白粉おしろい、あぶらぎった面つらで、又イと覗のぞきこ込んで、

「大した勢いでございますのね。」

「ちよつと……出よう。」

……ですもの、舞台どころですか。――

「結構ですわ、ほんとに境さん、ご全盛で。」

「串 戯 だろう。」

「役者があなた、この大入おおいりに、花道で、名前の広告をするんだもの。大したものでなくつてさ。」

と、くくり頤あごを揺ゆつて、しゃくる。

「あれは洒落しやれだよ、洒落も洒落だし、第一、この人数だ、境というのは。」

売店があるから、ずんずん廊下を反れました。

「何も私一人というんじやあなからう。」

「うんえ、あの台辞せりふで、あなたの機敷を見て笑ったのを見て、それで気がついた、あなたの来ているのが。……といったわけなんですもの、やすい祝儀じゃでけんでねえ。」

と、どこかのなまりが時々出る。

「馬鹿を言いたまえ、路之助は友だちだぜ。――おかみさん、知ってるじゃないか。」

「それは存じておりますがね、ご全盛には違いませんね。何しろ、しがない待合を、勘定で泣かせようという勢いではありませんです。」

「ないが上にもないものを、ありあまつてでもあるように。催促の術てをうらがえしに、敵はからめて搦手へ迫つて危い。」

「一言もない。が、勢いだの全盛などは、そっちの誤解さ、お見違えだよ。」

「見違えましたよ、ほんとうに。」

と衣紋をたくして、

「大した腕だよ、見上げたあよう。」

「何が。」

「なにがじゃあないじやないかね、といたくなるよ。ふんとうに。……新橋柳橋、それとも赤坂……ご同伴は。」

「……………」

「ちよつと見掛けませんね、あのくらいなのは。商売がらお恥かしいんだけど……三千歳とせおいらんを素人づくり……おつと。」

と両袖を突張つっぱつて肩でおどけた。これが、さかり場の魔所のような、ひあわい廂合から暗夜やみが

覗のぞいて、植込の影のさす姿見の前なんですが。

「芸妓げいしやにしたという素敵な玉だわ……あんなのが一人、里にいれば、里の誉れ、まあさね、私のうちへ出入りをすれば、私の内の名みょうもん聞きですのよ。……境さん、貸か借かりも、もとは味方、勘定は勘定、ものは相談、あなたとはお馴染なじみじやありませんか。似合にあったよ、恐れ入いったよ、ものになつてる、容子ようすがね。うんねさ、だからさ、一度連込んでおいでなさいよ。早い話はなしが……今夜、これから帰りにさ。水打みづった格子さきへ、あの紫むらが裳すそをぼかして、すり硝子がらすの燈あかりに、頸えりあしをくつきりと浮かして、ごらんささい、それだけで、私のうちの估券こけんがグツと上りまसान。

兜かぶと町ちやうの、ぱりぱりしたのが三四人、今も見物で一所ですがね。すぐ切上げてもいいんですの。ちよつと一座敷、抜け荷を売りや……すぐに三十と五十さ、あなた。あなたの遊興あそびは、うわになるわ。

もう一息、目を眠なつて、——直さん……」

「——直さんの意味詳つまびらかならず。談者、境氏に聞かんとして、いまだ果さざる処ところである——」
「ね、色悪いろで、あの白々とした甘い膚はだを貸かすとなりや、十倍だわ。三百、五百、借金も勘定も浮ういて出るじやあないかねえ。」

酒と、女か、目にも口にも借りのある、蓆棧敷のどんちきも、むらむらとして、我ながら姿見に色が動いた。

「何をいつてるんだ——同伴つれはないよ。」

「あら。」

「誰も居やしない。」

「まあ。」

「私一人じゃあないか。」

「おやおやおや。」

「何を見たんだ。」

「ふん、しらじらしい、空ツとぼけもいい加減になさい。あなたがそういう了り簡けんなら、いいから私は居催促をするから、ここへ坐つちまいますから、よござんすか。」

これこの十九貫、廊下へ、どすんと坐りかねない。

「仕方がない、じゃあ、ほんとうの事をいおう。」

「いわないでさ。そして、ちよつと顔を貸しますか、それとも膚はだを……。」

「顔にも、膚にも……それは煙けむだ。」

「またかね、居催促ですよ、坐りますから。」

「あれは霞だ、霧なんだよ。」

「煙草たばこのかねえ。」

「いや芸妓げいしやの……幽霊だ。」

「ええ。」

「この大入に、けちでもつけるようで可厭いやだから、いいたくはなかつたんだが、どうもそうまでいわれりやしかたがない。三千歳を素人とか、何とかいったね、それだ、そっくりだ。そりや路之助に憑つき絡まとつてる幽霊だ。いいえ、憑つきものは、当人の背中に負おぶさっているとは限らない——

実は祇園の芸妓だがね、私がこの間、彼地あつちへ行つていたもんだから、路之助が帰るのに先廻りをして、私を便つて来たらしい。またかと思う。……今いわれた時も慄然ぞつとしてこの通り毛穴が立つてら。私には何にも見えないんだよ。見えないが、一人で茶屋へ休むと、茶二つ、旅籠屋はたしやでは膳が二つ、というのが、むかしからの津々浦々の仕来りしきたでね、——席には洋服と、男ばかり三人きりさ。それが、お前さんに見えたのは、幽霊に違いない。」

「ひええ。」

しめた。不断の^{だいおくびょう}大臆病。

「行つて見たまえ、覗^{のぞ}いてごらん、さあ。それが嘘なら、きつとあそこにいやしない。いても、目には見えないから。」

「気味の悪い……いやだねえ。」

「板一枚のなかは、蒸し上るばかりのこの人数だ。幽霊だつてどうするものか。行つて覗いて見たまえ、というのに。」

あたかもそこへ、魔の手が立樹を動かすように、のさのさと相撲の群が帰つて来た。

「それ、力士連が来た、なお気丈夫じゃあないか。」

と、図に乗つていった。が、この巨大なる^{からだ}軀は、威^{おし}すものにも陰気を浴せた。それら天井を貫く影は、すつくと電燈を黒く蔽^{おほ}つて、廊下にむらむらと影が並んで、姿見に、かきなり映つた。

「ここへ来た、幽霊が。」

「ひゃあ。」

「あ、力士の中に芸妓^{げいしや}が居る。」

「きやッ、あれえ、お関取。助けてえ。」

「やあ、何じやい。」

縫すがりつかれた関取がたじろいで、

「どえらい頭ずこじやい。棧さんだらぼつち俵法師い。」

「お絹さん——お絹さん。ちよつと。」

戸を開けて、立ちながら密そつと呼ぶと、お絹は、金煙管きんぎせるに持添えた、女持ちの嵯峨錦さがにしきの筒を襟下に挟んで、すつと立った。

前髪に顔を寄せ、

「何だか落着きません、一度、茶屋へ引揚げよう。」

四

その夜も——やがて十一時——清きよ水みづの石段は、ほの白く、柳を縫ぬって、中なか空ぞらに高く仰がる。御堂は薄墨の雲の中に、朱の柱を聯つらね、丹にの扉を合せ、青蓮せいれんの釘かくしを装つて、棟もろとも、雪の被衣かづぎに包まれた一座の宝塔のように淨きよく厳いつくしく聳そびえて見ゆる。

東口を上ると、薄く手水鉢ちようずばちに明りのさしたのは、斜ななめに光を放った舞台正面にただ一つ掲げた電燈で、樹にも土にも、靈境を照らす光明はこの一燈ばかりなのが、かえってよく燭の靈を表して、竜燈……といつては少し冥くらい。しかり、明星の天降あまくだつて、梁を輝うつぱりかしつつ、丹碧青藍相彩たんぺきせいらんる、格子に、縁に、床に、高欄に、天井一部の莊嚴を映すらしい。

見られよ、されば、全舞台に、虫一つ、塵も置かず、世の創はじめの生物に似た鰐わにぐち口も、その明星に影を重ねて、一いつか顆のだいへきぎよく碧玉ちりばを鏤くめたようなのが、棟裏に凝こつて紫の色を籠こめ、扉みなぎに漲おぼろつて朧なる霞を描き、舞台に鬚たなび鬚なびき、縁を廻めぐつて、井欄せいらんに数かずうる擬宝珠ぎぼしゆを、ほんのりと、さながら夜桜の花の影に包んでいる。

その霞より、なお濃こまやかに、靄もやに一面の胡粉ごふんを刷はいて、墨と、朱と、藍あいと、紺こんじよう青と、はた金色こんじきの幻を、露に研みがいて光を沈めた、幾面の、額の文字と、額の絵と、絵馬の数と、その中から抜き出たのではない、京人形と、木菟みみずくは、道芝の中から生れて出たように上つたが。――

「車わかいしゆ夫、ここだ、ここでおろして。……待まちつてもらおう。」
 俣くるまを二台、東の石段で下りたのです。

「逆縁ながら、といつては間違いかね、手を曳いてあげようか。芝居茶屋の階子段のお手際では、この石段は覚束ない。」

などと、木菟が生意気にいうと、

「大事おへん、前刻落ちたら、それなり、地獄え。上が清水様どすよつて、今度は転んだかて成仏どす。」

などと京人形が口を利いた。

手水鉢で、蔽の下を、柄杓を搜りながら、雫を払うと、さきへ手を浄めて、紅の口に啣えつつ待った、手巾の真中をお絹が貸す……

勝手になさい。

が、こんなのが、初夜過ぎた霊場へ、すらすらと参られようはずはない、東の階の上に、一本ならべの軽い戸だが、柵のように閉ざしてあった。

「前は、こうではなかつたはずです……不良でも入るか知らん。」

「こちらも不良どすな、おほ、ほ。」

「怪しからん、——向う側へ。」

と、あとへ退つて、南面に、不忍の池を真向いに、高欄の縁下に添つて通ると、欄干

の高さに、御堂の光明が遠くなり、樹の根、岩角と思うまで、足許あしもとが辿々たどたどしい。

さ、さ、とお絹の褌つまきば捌はきが床を抜ける冷たい夜風に聞えるまで、闐然げきぜんとして、袖に棲ひとはだに散る人膚の花の香に、穴のような真暗闇まつくらやみから、いかめの鬼が出はしまいか——私は胸を緊しめたのです。

「まず、可よし。」

西側の、ここの階段上は、戸はあるが、片とぎしで開いていた。

廻廊の上を見れば、雪空でもあるように、夜目に、額と額とほの暗く続いた中に、一ひ処ところ、雲を開いて、千手観世音の金色の文字が髻ほうふつ髻ふつとして、二十六夜の月光のごとく拝される。……

欄干に枝をのべて、名樹の桜があるので。

その梢こずえ、この額と相對して、たとえば雪と花の縁を、右へ取り、舞台の正面、その明星と、大碧玉の照る処、京人形と木菟が、玩弄品おもちゃの転ころがったようになって拝んだあとで、床の霞に棲ひを軽く、衝つと出て、裏紫の欄干に、すらりと立った、お絹の姿は——

この時、幹の黒い松の葉も、薄靄うすもやに睫毛まつげを描いた風情して、遠目の森、近い樹立こだち、枝も葉も、桜のほかは、皆柳に見えた。

「ああ、綺麗だ。お絹さん——向い合つた不忍の御堂から、天女がきつと覗いておいでだ。」

「おお晴がまし、勿体ないえ。」

と、吃驚したように、半ばその美しさを思つていて、羞じたように、舞台を小走りに西口の縁へ遁げた。遁げつつ薄紫の肩掛で、鬘も鬘も蔽いながら、曲る突当りの、欄干の交叉する擬宝珠に立つ。

踊の鍊で、身のこなしがはずんだらしい、その行く時、一筋の風がひらひらと裾を巻いて、板敷を花片の軽い渦が舞つて通つた。

袖摺れるほどなれば、桜の枝も、墨絵のなかに蕾を含んで薄紅い。

「そこから見えますか、秋色桜。」

「暗うて、よう見えへんけど……先度昼来ておそわつた事があるよつて、どうやらな、底の方の水もせんせんと聞えるのえ。」

「音羽の滝が響くんでしようが、秋色は見えないはずだ。そこに立っているんだから。」

「またなぶらはる……発句も知らん、地唄の秋色はんで、どないしよ。」

と、振返ると、顔をかくしたままの羅の紫を、眉が透き、鼻筋が白く通つて、優睨み

で凜とした。

花咲かば告げむと

いいし山寺の

使は来たり、馬に

鞍

くらまの山のうず

桜……

ふと、前刻の花道を思い出して、どこで覚えたか、魔除けの呪のように、わぎと素よみの口の裡で、一步、二歩、擬宝珠へ寄つた処は、あいてはどうかやら鞍馬の山の御曹子。……それよりも楠氏の姫が、田舎武士をなぶるらしい。——大森彦七——傍へ寄ると、——便のういかげや——と莞爾して、直ぐふわりと肩にかかりそうで、不気味な中にも背がほてつた。

「やあ、洒落れてるなあ。」

——そのころは、上野の山で、夜中まだ取締りはなかったらしい。それでも、板屋漏る燈のように、細く灯して、薄く白い煙を靡かした、おでんの屋台に、車夫が二人、丸太を突込んだように、真黒に入っていたので。

「羨しいようですね……串戯じゃない、道理こそ。——来てごらんなさい、こちらの、西側へ俵を廻わしたのが、石段下に、変に遥な谷底で、熊が寝ているようですから。」

「動物園かであるいうよつて、密そツと出て来やはりしめえんか、おそろしな。」
と、欄干らんかんぞいに、姫ひめぎみ、お寄りなされたが、さして可こ恐わくはなさそうで。

「ほんに、谷底もやのようで霨もやが深うおすな、前さつき刻きの階はしご子だん段だん思し出だしたら、目めがくらくらとす
るようえ。」

白かたてい片かたて掌てを田舎武士いんげんの背せにあてて、

「あの俣またがひとりでに、石段いしだんを、くるくるまいもうて上あつて来たら、どないしよ、……火
の車くるまになつておそろしかりな。」

「お絹ぬいさん、そんなことをいうもんじやあない。帰かえり途とに怪我けがでもあると不可いけい。」

「それでも、あの段だん、くるくる舞まうてころげた時は、あて、ぱツと帯紐おびづなとけて、裸はだか身かみで
落ちるようにあつて、土間どまは血ちの池いけ、おにが沢山さわいやはつて、大火鉢おほひしに火あが燃もえた。」

手てを触ふれていて、肌はだをいう。大森彦七おほもりひちは胸むねが唸うなった。魔まを退ひきようと太刀たちの柄つか……洋ステツ
杖きをカンとついで、

「そんなことをいうから、それ、宙そらに火あが燃もえて来た、迎むかいに来た、それ。」

「ああれ。」

闇やみを縫ぬつて、くるくると巻まいて来る、火あの一点いっあり。事こと実じつ、空そら間まに大おほきく燃もえたが、雨あめ

落まに近づいたのは、卷ま 蓆きたで、半被股引はつびももひき 真黒まつくろな車わかいしゆ 夫おが、鼻息はなを荒あく、おでんの盛もり込こみを一皿いっぴん、銚ちようし子しを二本にほんに硝子盃コップを添そえた、赤塗あかぬの兀はげ盆ぼんを突つ上げ加減かへんに欄干らんかん越こす。両りやう手で差上げたから卷蓆まきを口に預けたので、煙けむりが鼻はなに沁しむ響しめ面めんで、ニヤリと笑わらつて、

「へい、わぎツとお初穂……若奥様。」

「馬鹿な。」

「ちよつと、手をお貸しなすつて。」

「馬鹿な、お初穂もないもんだ。いい加減おみつてるじやないか。」

「へへへ、煮加減にえかげんの宜よろい処しと、お爛かんをみて、取とりつけて置おきましたんで、へい、たしかに、

その清らかな。」

「馬鹿な、おなじ人間にんげんだぜ、くいものは、つツくるみだ。そんな事はかまわれないが、大丈

夫おかい、あとで、俵はつは？」

「自動車の運転手とは違います、えへへ。駕籠昇かごかきと、車夫くるまやは、建場たてばで飲のむのは仕来りしらいでさ。

ご心配ごしんぱんなさらねえで、ご緩ゆつくり。若奥様わがうさまに、多分たぶんにお心付こころづを頂たまきました。ご冥加みょうがでして、

へい、どうぞ、お初穂を……」

お絹すなが柔順なごに、もの軟やわらかに取とり上げた、おでんの盆ぼんを、どういふものか、もう一度彦彦ひこひこ七しちがわ

ざとやけに引取つて、

「飛んだお供物、狒々にしやがる。若奥様は聞いただけでも、禿祠で犠牲を取つたようだ。……黒門洞揺鉢大夜叉とでもいうかなあ。」

縁に差置いた湯気の立つおでんの盆は、地図に表示した温泉の形がある。

椎の葉にもる風流は解しても、鯛のぬたでないばかり、この雲助の懐石には、恐れて遁げそうな姫ぎみが、何と、おでんの湯気に向つて、中腰に膝を寄せた。寄せたその片褸が、ずるりと前下りに、前刻のまま、小袖幕の綻びから一重桜が——芝居の花道の路之助のは、ただこれよりも緋が燃えた——誘う風にこぼるる風情。

——実は帯を解いて、結び直す間がなかつた、茶屋が立籠んだからなので。——あれから、直ぐにその茶屋へ引上げて、吸物一つ、膳の上へ、弁当で一銚子並べたが、その座敷も、総見の控処で、持もの、預けもの沢山に、かたがた男女の出入が続いたゆえ、ざつと夕餉を。……銚子だけは手酌でかえた。今夜は一まず引上げよう、乗ものを、と思う処へ、番頭津山が急いで出て、もうお俵は申しつけました……という、客あつかいに馴れたもの。急所を圧えてこつちからは乗出させぬ。ご都合まで、ご存分な処まで、は、は、は、と口を圧えて笑うと、お絹が根岸の藍川館——鶯谷へ、とこの人の口でいうと、町

が嬉しがって、ほう、と微笑ほほえんで鳴きそうに聞いた。寂しい処でございますな、境さん——これはお送り下さらないではなりませんまい。……勿論。

京では北野へ案内のゆかりがある。切通しを通るまえに、湯島……その鳥居をと思つたが、縁日のほかの神詣かみもうで、初夜すぎてはいかかと聞く。……壬生みぶの地藏に対するものは、この道順にちよつとない。

そこで、どこよりも清水だったが、待つた、待つた。広小路の数万の電燈、靄もやの海の不知火らぬいを掻かき分けるように、前の俵を黒門前で呼留めて「上野を抜けると寂しいんですがね、特に鶯谷へ抜ける坂のあたり、博物館の裏手なぞは。」

「寂しいとこ行きたい、誰も居やはらんとこ大好きです。」すかし幌ほろの裡なかから、白木蓮はくもくれんのような横顔なのです。

「大事ないどすやろえ、お縁の……裏の処には、蜜柑みかんの皮やら、南京豆なんきんまめの袋やら、掃き寄せてあつたよつてにな。」

「成程、舞台傍わきの常茶店では、昼間はたしか、うで玉子なども売るようです。お定りの菘こ菘こに、雁がんもどき、焼豆腐と、竹輪などは、玉子より精進の部に入ります。……第一こ

れで安心して、煙草が吹かせる。灰もマツチ殻も、盆へ落すと。……よくない奴だ。——
これはどうもお酌は恐縮、重ねては、なお恐縮、よくない奴だ。」

巻 まきたばこ 莨 コップ と硝子盃を両手に、二口、三口重ねると、おさ 压えた芝居茶屋の酔を、ぱつと誘つた。

「さあ、お酌を——是非一口、こういうことは年代記ものです。」

お絹も、心ばかり、ビイドロの底を、琥珀こはくのように含んで、吻ほっと呼吸いきしたが、

「ああ、おいし……茶屋ではな、ご飯かて、針を吞むようどしたえ。ほんに、今でも、ひざのそこ、ぶるぶると震えるわ、莨莨はんのようどすな。」

もう一口。

「あの、これから場所へいうて、二階の上り口へ出ましたやろ。下に大きな人大勢やよつて、ちよつと立留のぞまって覗くようにするとな、ああ、灯ともが点れかけの暗さが来て、逢魔おうまが時や思うたらな、路之助はんの幟のぼりが沢山たん、しんなり揃う青い中から、大き大き顔が出てな。」

「相撲のだね。」

「違います、女子おんなはんの。」

「……………」

「口をばこないにして。」

と結んだ唇を、おくれ毛が凄く切った、黒い蝶が不意に飛んだように。

「可恐い顔をして睨みはった。それがな、路之助はんのおかみはんえ。」

「路之助? ……路之助の…………」

立女形、あの花形に、蝶蜂の群衆つた中には交らないで、ひとり、東髪の水際立

つた、この、かげろうの姿ばかりは、独り寝すると思つたのに――

請う、自惚にも、出過ぎるにも、聴くことを許されよ。田舎武士は、でんぐり返って、

自分が、石段を熊の上へ転げて落ちる思がした。

「何もな、何も知らんのえ、私路之助はんのは、あんたはん、ようお馴染の――源太はん、

帯が弛む――いわはった妓どすの。それをば何やかて、私にして疑やはってな、疑やはる

ばかりやおへん、えらいこと怨みやはる。

……よつて、お客はんたちに分れて、一人で寝るとな――藍川館いうたら奥の奥は、鉄

道線路に近うおすやろ。ガツガツ響がして、よう寝られん、弱って、弱って、とろりする

と、ぐウト、緊めて、胸倉とつて、ゆすぶらはる、……おかみはんどす。キヤアいうて、

恥かし……長襦袢で遁げるとな、しらがまじりの髪散らかいて、般若の面して、目皿にして、出刃庖丁や、撞木やないのえ。……ふだん、はいからはんやよって、どぎついナイフで追っかけはる。胸かて、手かて、揉み、悶えて、苦して、苦して、死ぬるか思うと目が覚める……よって、よう気をつけて引結え、引結えしておく伊達巻も何も、ずるずるに解けてしもうて、たらたら冷い汗どすね、……前刻はな夢でのうて、なおおそろしておそろして。」

それで、あの、階子段——

今度は大森彦七が踏みこたえた。

「神経だ、神経ですよ。」

誰でもこの場は知識になる。

「しかし、どうだか、その路之助一件は、事実なのでしょう。」

誰でもこの場は凡夫になる。

「つらいこと。」

と、斜ななめにそむいて、

「あんたはんまで、そない言わはる、口惜くやしいえ。」

「が、しかし、つらいでしょう。」

荻たばこを捨てて硝子盃コップを取って、

「そんな時は、これに限る。熱爛あつかんをぐつと引つけて、その勢いで寝るんですな。ナイフの一挺ちようなんざ、太神楽だいかぐらだ。小手こてしらべの一曲いっくき。さあ、一つ。」

「やどへ行て。」

「成程。」

「あんたはん、のましてくりやはりますか。」

「飲ませますとも。」

「嬉しいな、段で、抱いてくれやはった時から、あんたはんは生命いのちの親おやです。」

真顔で、こうまでいわれたのには、酒さけが支つかえた。胸の澄すまない事がいくらある……

「お言ことばで痛いたみ入る。」

と、もう一息ぐつと呷あおつて、

「——実は串じようだん戯ごだけれどもね、うっかり、人を信じて、生命いのちの親おやなどと思つては不可いけません。人間は外そとづら面めんに出でさないで、どういふ不ふ了りょう簡けんを持もつていないとも限りません。

こういう私わたしですがね、笑い事わらひことじゃあるけれども、夢ゆめで般若はんにやが追廻おぼすどころか、口くちで、と

いうと、大層口説くげつでもうまそうだ。そうじゃない、心で、お絹さんを……」

「私をえ？」

「幽霊にしましたよ。ご免なさいよ。殺した事があるんだから。」

「あんたはんがな。」

前髪がふっくり揺れて…差俯さしうつむ向く。

「本望どすな。」

と莞爾にっこりして、急に上げた瓜核うりざね顔が、差向いに軽く仰向あおむいた、眉の和やかさを見た目

には、擬宝珠が花の雲に乗り、霞がほんのりと縁を包んで、欄干が遠く見えてぼうとなつた。その霞に浮いて、ただ御堂の白い中に、未開紅なる唇が夜露を含んで咲こうとする。

……

「あれえ。」

声を絞ると、擬宝珠の上に、円鬚まるまげが空ざまに振られつつ、

「蛇が、蛇が。」

「何、蛇が。」

「赤い蛇が。」

赤い蛇は、棲つまの乱れた、きみの裾つまのほかにあるものか。

「膝が震えて、足が縮む……動けば落ちようし、どないしよう。」
と欄干に、わなわな。

「今時蛇が、こんな処へ。……不忍の池には白いのがいるというが。」
と、わざと落着いたが、足もとほうろつきながら、外套がいとうの袖で、背後うしろざま状にお絹を囲
った。

「額の、額の。」

ああ、幽かすみに見ゆる観世音の額の金こんじき色と、中を劃しきつて、霞の畳まる、横広い一面の額の
隙間ひとすじから、一条たらりと下っていた。

「紐だ、紐ですよ。何かの。」

勇を示して、示しついでに、ぐい、と引くと、

「あれ、……白い顔。」

声とともに、くなりと膝をついたお絹が、背後うしろから腰につかまった。

「上から覗のぞかはる……どうしようねえ。」

お聞きづらからうが、そういつた意味で、身震いをする勢いが手伝って、紐に、ずるず

ると力が入ると、ざ、ざ、ざ、と摺れて、この場合——ごみも埃もいってはおられぬ。額の裏から、ばさりと肘に乗ったのは、菅笠です。鳩の羽より軽かったが、驚くはずみの足踏に、ずんと響いて、どろどろと縁が鳴ると、取継った手を、アツと離して、お絹は、板に手をつけて、真俯向けになりました。

おでんの膳なぞ一跨ぎに、今度は私の方が欄干へ乗出して、外套を払った。かすりの羽織の左の袖で、その笠の塵を払ったんです。一目見ると分ったのです。女の蒼白く見えしたのは、絵の具です。彩色なんです。そうして、笠に描いたのは、……朝顔——

「朝顔？」

五

ここに写し取る今は知らず。境の話を聞くうちは、おでん爛酒にも酔心地に、前中、何となく桜が咲いて、花に包まれたような気がしていたのに、桃とも、柳ともいわず、藤、山吹、杜若でもなしに、いきなり朝顔が、しかも菅笠に、夜露に咲いたので、聞く方

で、ヒヤリとした。この篇の著者は、そこで、境に聞反ききかえしたのであった。

「朝顔？」
と。

六

「——その時から、やがて八九年前になります——山つづきといっても可い——鶯谷にも縁のありますところに、大野木元房おおのきもとふさという、歌人うたよみで、また絵師えかきさんがありまして、大野木夫人、元房の細君は、私の女友だち……友だちというよりおなじ先生についた、いわば同門の弟子兄妹……」

こう話しかけた、境辻三の先師は、わざと大切な名を秘そう。人の知った、大作家、文界の巨匠である。

……で、この歌人うたよみさんとは、一年前、結婚をしたのでしたが、お媒酌人なこうども、私どもの先生です。前から、その縁はあるのですけれども、他家よそのお嬢さん、毎々往来をしたという中ではありません。

清瀬洲美さんというんです。

女学校出だが、下町娘。父親は、相場、鉾山などに引かかって、大分不景気だったようですが、もと大蔵省辺に、いい処を勤めた、退職のお役人で、お嬢さん育ちだから、品がよくちよつと権高なくらい。もつとも、十八九はたちごろから、時々見た顔ですから、男弟子に向つては、澄ましていたのかも知れません。薄手で寂しい、眉の凜とした瓜核顔の……佳い標致。

申すのを忘れますまい。……さしあたり、……のちの祇園のお絹を東京にしたような人だったんです——いや、どうも、若気の過失、やがての後悔、正面、あなたと向い合つては、慙愧のいたりなんです、私ばかりではありません。そのころの血気な徒は、素人も、堅気、令嬢ごときは。……へん、地者、と称えた。何だ、地ものか。

薬でも、とろろはあやまる。……誰もご馳走をしもせぬのに。とうとい処女を自然薯扱ひ。蓼酢で松魚だ、身が買えなけりや塩で揉んで蓼だけ噛れ、と悪い虫めら。川柳にも、（地女を振りも返らぬ——盛。）そいつは金子を使つたでしょうが、こつちは素寒貧で志を女郎に立てて、投げられようが、振られようが、赭熊と取組む山童の勢いですから、少々薄いのが難だけれど——すなおな髪を、文金で、打上った、妹弟子ごとき

ものは、眼中になかったのです。

お洲美さんが、大野木に縁づいたのは二十二の春——弥生ごろだったと思います。その夏、土用あけの残暑の砌みぎり、朝顔に人出の盛んな頃、入谷いりやが近いから招待されて、先生も供で、野郎連中六人ばかり、大野木の二階で、蜷しじみ汁じゅう、冷豆腐ひやうこどころで朝振舞がありました。新夫人……はまだ島田で、実家さとの父が酒飲みですから、ほどのいい爛かんがついているのに、暑さに咽喉のどの乾いた処、息つきとはいつても、生意気な、冷酒ひやざけを茶碗あおで煽あおつて、たちまちふらふらものになつて、あてられ気味、頭を抱えて蒼あおくなつた処を、ぶしつけものと、人前の用捨はない、先生に大目玉をくらつて、上げる顔もなかつた処を、「ほんの一口とおいいなさいましたものを、私がうっかりもり過ぎて」と妹分の優しい取なし。それさえ胸先に沁しみましたのに、「あちらでおやすみなさいまし。」……次ぎの室まへ座を立たせて——そこが女作家の書齋しゆさいでしたが。

蚊がいますわ、と団扇うちわで払つて、丸窓を開けて風を通して、机の前の錦紗きんしやのを、背に敷かせ、黙つて枕にさせてくれたのが。……

今更ひいきぶん鼻び尻しつぽん分ぶんでいうのではありません、——ちよッ、目力めか(助) 編へん輯しゅうめ、女の徳だ、などと蔭ふんまんで皆憤懣ふんまんはしたものの、私たちより、一歩ひとあしさきに文名を馳はせた才媛さいえんです、

その文金の高髻たかまげの時代から……

平打かんざしの簪かんざしで、筆を取る。……

銀杏いちようがえ返し、襟しまはちじようつきの縞くろじゆす八丈、黒縹ひつ子の引ひつかけ帯で、（たけくらべ）を書くよう

な婦人も、一人ぐらい欲しいとは、お思いになりませんか、お互いに……

月夜の水にも花は咲く。……温室のドレスで、エ口のおいを散らさなければ、文章が書けないという法はない。

——話はちよつとそれました。が、さあ、前後しました。後一年、不ひより断、不沙汰ばかり、といううちにも、——大野木宗匠は、……常つね袴はかまの紺足袋うがで、炎天にも日和下駄うがを穿うがつ。

……なぜというに、男は肝より丈まさり、応対をするのにも、見上げるのと、見下ろすのでは、見識が違ちがう。……その用意で、その癖くせひよろりと脊せが高い。ねばねばと優しい声を、舌こで捏こねて、ねツつりと齒こをすかす、言ことばのあとさきは、咽喉のどの奥おくの方かたで、おおんと、空からぜ咳きをせくのをきっかけに、指ゆびを二本鼻の下へ当てるのです。これは可笑おかしい。が、みつくちというんじやありませんが、上唇まんなかの真中まんなかが、ちよつと齒茎のぞを覗のぞかせて反さかっているのを隠かくすためです。言語、容体、虫が好あかかなくつて大嫌あかい。もつともそれでなくつても、上野の山下かけて車坂を過あかぐる時ひとンば、三島神社を右へ曲まがるのが、赤蜻蛉あかとんぼと齊ひとしく本能の

天使の翼である。根岸へ入っては自然に背く、という哲人であつたんですから、つい近間へも寄らずにいました。

郷里——秋田から微禄びろくした織物屋の息子ですが、どう間違えたか、弟子になりたい決心で上京して、私を使つて、たつて大野木宗匠を師に仰ぎたい、素願を貫かしてもらいたい、是非、という頼みです。

頼まれた。……頼まれたものは仕方がない。しかも、なくなつた私の父がこの織物屋に世話になつた義理がある……先生の内意も伺つた上……そこで大野木をたずねたのですが、九月末、もう、朝夕は身にしみますのに、羽織は衣がえの時から……質です。

ゆかた一枚、それも織つたんじやありません、北国人の鎧よろいですから、ものほしそうな瓦が斯織すおりの染縞そめしまで、安もの買の汗がにおう。

こいつを、二階の十畳の広間に引見した大人たいじん人は、風通小紋ふうつうこもんの単衣ひとえに、白の肌襦袢はだじゆばん、少々汚れ目が黄ばんだ……兄妹分の新夫人、お洲美さんの手が届かないようで、悪いけれども、新郎、膏あぶらが多いとお心得下さいまし。——綾織あやおりの帯で、塩瀬紺無地の袴はかま。総ふさついた、塗柄の団扇うちわを手まさぐる、と、これが内にいる扮装ふんそうで、容体が分りましよう。

鼻の下へ、例の、指を立てて、「おおん」と飲み込んでくれました。「不思議な縁です

ね、まだ下極^{したぎてま}りで、世間に発表はしないけれども、今度、仙台の——^{ある}一学校の名譽教授の内命を受けて、あと二月ぐらいで任に赴く。——ま、その事になりました。ちようど幸い、内弟子、書生にして連れて行こう、宜^{よろ}しくば。」……も何も無い。願^{かな}ったり叶^{かな}ったり、話は思う壺へはまったのですが。——となりの、あの、小座敷で、あの、朝顔の、あの朝

手細工らしい桔梗^{ききょう}の肘^{ひじ}つきをのせて、絵入雑誌を幾冊か、重ねて、それを枕にさして、黙^{もく}つて顔を見ると、ついた膝をひいて立ちしなに「憎らしい。」……ただ、その雑誌一冊ものなぞ、どれも皆——ろくなものではありませんが、私のかいたのが入っていたのを、後姿と一所に、半ば起^{そつ}きに、密^{みつ}と見た時、なぜか、冷酒^{ひやざけ}が氷になって、目から、しかも、熱いものがほろほろと湧^わきました。

時に、その人がいま出て来ません。その癖、訪れた玄関では、女中よりさきに、出迎えて、二階へ通してくれたのに、——茶を運んだのも女中です。

庭で蟋蟀^{こおろぎ}の鳴くのが聞える。

蔦つたの葉の浴衣に、薄藍うすあいと鶯うぐいす茶ちやの、たて縞しまお召おほりの袷羽織あわせばおりが、しつとりと身たけに添つって、紐ひもはつましく結むすんでいながら、撫肩なでがたを弱よく迂すべった藤色ふじいろの裏うらに、上品じやうひんな気が見えて、緋色ひいろ無地むぢの背負しよいあげ上なまめが媚めいかしい。おお、紫手絡てがらの円鬘えんまだ。透通てうてうるような、その薄化粧うすけいざう粧ま。

金銀きんぎんでは買かえないな。二十三か、ああ、おいらは五ごになる。作者さくしや彫間なにかまの、しかも兄哥あにぎが、このしみつたれじやあ、あの亭主ていしゆにさぞ肩身かたみが狭せまかろう、と三和土さんわどへ入いると、根岸ねぎしの日蔭ひかげは、はや薄寒うすかぜく、見通みとおしの庭にわに薄うすが靡なびいて、秋あきの雲うみの白しろいのが、ちらちらと、青あおく澄すみんだ空そらと一所いしょに、お洲美しづみさんの頸えりに映うつつた。

目の前まへにあるその姿すがたが、二階にがいへは来きないのです。御厚意ごこういは何なにとも。しかし内弟子うちでしに住込すまこませるとまでおつしやつて下さいますと、一度いちど（何なにといおう……——女史によし。）女史によしに御相談ごさうだんの上うへでありますといかがでしょうか。「おおん」と咳せきして、「ところがね、それが妙たぎですよ、不思議ふしぎです。——妻さいがね、今朝けさです——今日は境さかいさんが見えそうな気がする、というのです。ついぞ、おいでになりもせぬのに、そんなことが、といひますとね、手てを出だしさない、手ての筋すぢを見てあげましょう。あなたの今日の運命うんめいにも頭あたまられるから。——そういうのでね、手てを見みせました。……妻さいに、あんなかくし芸げいがあるとは知りませんでした

よ。妻が予知して、これが当って、門生志願が秋田の産、僕の赴任が仙台という、こう揃ったのに、何の故障がありますか。……お底かげでね、おおん、お底もおかしいですが、手の筋で、妻と握合いました。……境さん、変な話ですが、お互いに、芸術家は情熱をもって生命として活いきるのですな。妻もご同門ではあり、芸術家です、どんなに、その愛情が灼やく熱ね的てきであろうか、と期待しましたのに、……どうも冷たい。いかにも冷やかですが、稟ひんせい性のしからしむる処ですか。あるいは、あなた方、先生の教えは、芸に熱して、男女間は淡泊、その濃密膠こうちやく着ちやくでなく、あつさりという方針でもおあんなさるか、一度内々で、と思つた折でもありますのでして。……失礼します。……居いた堪たまらなくて、座を立つと、——「散歩をしましょう。上野へでも、秋の夕景色はまた格別ですよ。」こつちはひけすぎの廊下ろうか下とんびだ。——森の夕ゆう鴉がらすなどは性に合わない。

「あの、いま、そういおうと思つていた処です。なんにもありませんが、晩のご飯を。」

まだ入れかえない葦戸よしどに立つて、夫人がほの白く、寂しそうに薄暮合を、ただ藤紫で染めていた。

その背の、奥八畳は、絵の具皿、筆おき、刷毛はけ、毛氈もうせんの類たぐいでほとんど一杯。で、茶の間らしい、中の間の真中まんなかに、卓子台ちゃぶだいを据えて、いま、まだ焼海苔の皿ばかり。

みつどもえ
三 巴に並んだ座蒲団を見ると、私は玄関へ立ち切れなかった。

「すぐお爛がつきますが。境さん、さきへ冷酒ですか。」

「いや、断ものです。」

と真中へよれよれの袖口を、そつとのぼして、坐ると、どうも、そつちが上席らしい、

奥座敷の方へお洲美さん。負けてはいないな、妹よ、何だか胸が熱くなる。紺の袴は、入口の茶棚傍を勢い然るようになんで、着席です。

「牛が宜しい……書生流に、おおん。」

亭主のすきな赤烏帽子を指揮する処へ、つくだ煮を装分けた小皿に添えて、女中が銚子を運んで来た。

「よく、いすいだかい。」

「綺麗なお銚子。」

色絵の萩の薄彩色、今万里が露に濡れている。

「妻の婚礼道具ですがね、里の父が飲酒家だからですか。僕は一滴もいけませんまい、妻はのまず。……おおん、あの、朝顔以来、内でこれの出たのはそうですね、大掃除の時、出入りの車夫に振舞うたばかりですよ。」

「お毒見をいたします。」

お洲美さんが白い手で猪口ちよくを取った。

「注いで下さい。」

大人驚いた顔をして、

「飲むのかね。」

「大掃除の時の車夫のお銚子ですから。——この方は、あの、雲助も同然の身持だけれど……先生の可愛い弟子です。」

かねて、切れた眦めじりが屹ぎっとして、

「間違いがあると、私が、先生に申訳がありません。」

「おおん、何か、私の饒舌しゃべった意味を取違えているようだけれど、いいさ、珍らしく飲むのも可よからう……注ぐよ。」

「なみなみと。もう一つ。もつと、もう一度。」

歯はぎしみするように、きツきツと。

「ああ、飲んだ。」

と、もう白澄まぶたんだ瞼まぶたを染めた。

「境さん、いいでしょう、上げますわ。」

「駕籠屋は建場を急いでいます、早く飲もうと思つてね。」

「おいらんのようにはいきません。お酌は不束ですよ、許して下さい。」

「こつちも駆けつけ三杯と、ごめんを被れ。雲足早き雨空の、おもいがけない、ご馳走ですな。」

と、夫人と見合つた目を庭へ外らす。

大人の頤が上つて、

「大分壮になりましたな、おおん。」

「あなた、電燈を捻つて下さい。」

牛肉もふつつ煮えて来た。

といううちにも、どういうものか、皿に拵げた、一側ならべの肉が、鍋へ入ると、じわじわと鳴ると齊しく、箸とともに真中でじゆうと消え失せる。注すあと、注すあと、割醬油はもう空で、葱がじりじり焦げつくのに、白滝は水気を去らず、生豆腐が堤防を築き、渠なつて湯至るの観がある。

「これじゃ、牛鍋の湯豆腐ですね。」

ふうと、お洲美さんの鼻のつまつた時は、お銚子がやがて四五本目で、それ湯を、それ焦げる、それ湯を、さあ湯だ、と指揮さしずと働きを亭主が一所で、鉄瓶てつぺいが零ゼロのあとで、水指みずさしが空になり、湯沸ゆわかしが俯向けうつむになつて、なお足らず。

大人、威丈高に伸び上つて、台所に向い、手を敲たたいて、

「これよ、水じゃ、水じゃ。」

七

が、妹分のために、苦にせまい。肉の薄いのは身代しんしよの瘦やせたのではない。大人は評判の蓄財家で、勤儉の徳は、範を近代に垂るといつても可いのですから。

その証拠には、水騒ぎの最中へ、某雑誌記者、気忙きせわしそうで口早な瘦やせた男の訪問があり、玄関で押問答の上、二階へ連れて上つたのは……挿画さしえ何枚かの居催促、大人に取つては、地位転換、面目一新という、某省の辞令をうけて、区々たる挿画さしえごときは顧みなかつたために債が迫つた。顧みないにした処で、受合つた義理は義理で、退引のつびきならず二階で、膝詰きせうの揮毫きごうとなる処へ、かさねて、某新聞の記者、こちらは月曜附録とかいう歌の選の督

促で一足後れたが、おくれただけ、なお怒ったように、階子段を、洋袴の割股で押上った。この肥ったので、二階へ蓋をしたように見えました。

「流行るんだなあ。」

編輯、受附、出版屋、相ともに持込むばかりで、催促どころか、めったに訪問などされた事のない、兄弟子は、夜風を横外頬へ、げっそりと腹を空かして、

「結構ですな。」

枯野へ霜がおりたような、豆府の土手の冷たいのに、押取って、箸を向けると、

「およしなさい。」

と酔ととともに、ふらふらとかぶりを振って、

「牛鍋の湯豆腐なんか、私の御馳走ではないのですから。……あなたのお頼みなさいました、そのお弟子さんですがね、内へおいでなさるんなら、この覚悟、ね、より以上かも知れませんか。お葱や、豆腐はまだしも、糸菘弱だと思つて下さいませ。お腹が冷たくなるんですから……お酒はあります。あ、私にも飲まして頂戴。もう一杯もつとき。」

「いや驚いた、いけますなあ。」

「一生に一度ですもの。」

「え。」

「いいえ、二度です。婚礼の晩、飲みましたの。酔いましたわ。」

「乱暴だなあ。しかし、痛快だ。お酌をするのも頂くのも、ともに光栄です。」

「お兄上。」

「……………」

「おほ、ほ。ああ酔った。私……お兄上にあたる方にお酌をさして罰が当る。……前に、

あなたが、まだ、先生のお玄関にいらつしやる時分、私が時々うかがう毎たびに、駒下駄を直

さして、ああ、勿体ない、そう思う、思う心は、口へは出ず、手も足も固くなるから、突つ

張つばって、ツンツンして、さぞ高慢に見えたでしょう。髪の毛一筋抜けたって、女は生命いのちに

かかります。置きどころもない身体からだを、あなたの目に曝さらすんですもの、形なりも態ふりもありは

しません。文学少女とかいうものだって、鬼神に横道なしですよ。自分で卑下する心から、

気がひがんで、あなたの顔が憎らしかった。あなたも私が憎いのね。——ああ、信のぶや（女

中）二階で手が鳴る。——虫むしが煩うるさい。この燈ひを消して、隣室となりのを点つけておくれな。」

その間、頸えりあし脚あしが白かった。振ふり仰あおむ向くと、吻ほっと息して、肩が揺れた、片手づきに膝を

くねって、

「ああ、酔つて来た、境さん、……おいらんとは。お睦じい？……」
と、バタリと畳へ手をつくると、浴衣の蔦は野分する。

「何をいつてるんです。」

「おいらんは何て方？……十六夜さん、三千歳さん？」

「薄雲、高尾でございます。これでもそこらで、鮎を撮んで、笹巻の笹だけ袂へ入れて振込めば、立ちどころに仙台様。——庭の薄に風が当る。……」

——寂しいな、お洲美さん、急に何だか寂しい気がする、仙台へ行ってしまわれては。「ですけどね、あの、ほかの世話はかまいませんけど、媒妁だけは、もう止してね。」と、眉が迫つて見据えるのです。

「媒妁？」

「——名はいいますまい、売ツ子ですよ。私たちのお弟子なかまではありません。別派、学校側の花形で、あなたのお友だちの方に——わかりまして……私を、私をよ、嫁に、妻に世話しようとなすつたのは誰方でした。」

「そ、それは、しかし、勿論、何だ。別派、学校側の……可。……その男が、私を通じて、先生まで申出てくれと頼まれたものだから……」

「お料理屋へ私をお呼び下すつて……先生が、そのお話を遊ばしたんです。——境が橋わたしの口を、口を利いた、と一言……一言おつしやるのを聞いた時、私、私……」

「お待ちなさい、待ちたまえ。——だから断つたから差支えないでしょう。」

「ええ、断りましたわ、誰があんな——あんな男に世話しようなんのつて、私、あなたが、私あなたが。」

「そりや無理だ、そりや無理だ、お洲美さん、あなたが、あの男を好きだか、嫌いだか、私がそれを知るもんですか。」

「だつて、だつて、ちつとでも、私を、私を思つて下すつたら、怪我けがにもあんな、あんな奴に。」

「無理だ、そりや乱暴だ。」

「ええ、無理です、乱暴です。だから、私、すぐそのあとで、それまで人をかえ、手をかえ、話があるのを断つていた——よござんすか——私も、あなたが大嫌いな、一番嫌いな、何より好かない、此家ここへ縁付ゆかりいてしまったんです。ほ、ほ、ほ。」

太白の糸を嚙かんだように、白く笑つて、

「乱暴でしょう。乱暴、乱暴だけど、あの一番嫌いな人を世話しようとした、その口惜くやしさ

に、世話しようとした人の、あなたですよ、あなたの一癖嫌いな男の許へ縁についた。無理です、乱暴です。乱暴ですけど、あなたは、あなただつて、そのくらいな著作をなさるじやありませんか。」

「何にもいわない。——もう、朝顔の、ま、枕の時から、一言もないのです。私は坊主にでもなりたい。」

お洲美さんは、睜つていた目を閉じました。そして、うなづくように俯向いた耳許が石榴の花のように見えた。

「私は巡礼……」

もうこの間から、とりあえず仙台まででも、奥州を巡礼してゆきたい気がするんです。まったくですわ。そういつたら、内の女中ツたら、ねえ、あの、私のような汚がり屋さんが、はばかりをどうするつて笑うんですの。巡礼といえ、いずれ木賃宿でしょう、野宿にしたつて、それは困るわね。でも、真面目ですよ、ご覧なさい——昨日も上野の浄明院石占寺の万田地蔵様に、お参りをして、五百体、六百体と、半日、日の暮方まで巡りましたらね、（水木藻蝶。）いい名でしょう、踊のお師匠さんに違いないのです。（行年二十七）として、名を刻んだ地藏様が一体、菅笠を——ああ、暑い、私何だか目が霞む。

——菅笠を。……めしていらつしやるんなら、雨なり、露なり、取るのは遠慮だったんですけど、背中に掛けておいでなすったもんだから、外して、本堂へ持って行って、お布施をして、坊さんに授けて貰つて来たんです。——これだつて女です、巡礼しても、ちつとでも、形のいいように、お師匠さんのを——あの、境さん、菅笠を抱きました時に、何となく、今日ね、あなたがいらつしやる気がしたんですよ——そ、それに二十七だとすると、もう五年生きられますもの。——押入なんかに蔵しまつておくより、昼間はちよつと秋草に預けて、花野をあるく姿を見ようと思ひますとね、萩も薄すすきも寝すてしまふ、紫苑しおんは弱し。……さつき、あなたのおいでなすつた時ですよ、ちやうど鶏頭の上へ乗つて見ましたの。そうすると、それがいい工く合あひに。」

ああ、そうか、鶏頭か。春日燈籠かすがどうろうをつつんで、薄の穂が白く燈ひに映る。その奥の暗い葉蔭に、何やら笠を被かぶつた黒いものが立たつていて、ひよろひよると動くのが、ふと目に着いてから気にかかつた。が、決意もなく、断行もない、坊主になりたいを口にするとも、どうやら、破やれころも衣ころものその袖が、ふらふらと誘いひに來きそううで不気味だつた。

「見せますわ、見せましようね。巡礼を。」

「大賛成です。」

「水木藻蝶さん、うつくしい人の面影ですよ。」

どこで脱いだか、はつとたちまち、うす鼠地に蔦を染めた、女作家の、庭の朧の立姿は、羽織を捨てて、鶏頭の竹に添っていた。

軽くはずして、今、手提に引返す。帯が、もう弛んでいる。さみしい好みの水浅葱の縮緬に、蘆の葉をあしらって、淡黄の肉色に影を見せ、蛍の首筋を、ちらちらと紅く染めた蹴出しの色が、雨をさそうか、葉裏を冷く、颯と通る処女風に、蘆も蛍も薄に映つて、露ながら白い素足。

二階の裏窓から漏れる電燈に、片頬を片袖ぐるみ笠を黒髪に翳して、隠すようにしたが、蓮葉に沓脱をひらりと、縁へ。

「ふらふらする。ちよつと歩行くと、ふらふらしますわ。酔っちまって。」
と、元の座にくずれた。

「ああ私、何だか分らない。」

ふう、と仰向けに胸の息づかい、乳の蔦がくれの膨みを、ひしと菅笠で圧えながら、
「巡礼に御報謝……ね。」

と、切なそうに微笑んだ。

電燈を背後うしろにして、襟のうすぐらい、胸のその菅笠が、ほんのりと、臙おぼろに白い。

「や、お洲美さん、失礼ですが、隠して下さい、笠を透とおして胸が白い、乳が映る。」

「見えますか。」

「申まはすも憚はばりだが、袖で隠して。」

「いいえ、いいえ。」

おくれ毛が邪慳じゃけんに揺れると、頬が瘦やせるように見えながら、

「嬉しい、胸が見えるんです。さ、遮るものなしに通った、心の記念かたみに、見える胸を、笠を通して捺塗なぞって見て下さい。その幻の消えないうちに。色が白いか何どのように、胡粉ごふん

とはいいませんから、墨ででも、洩しづででも。」

「雪がひとつか一掴みあればいいと思う。」

「信や……絵の具皿を引攫ひっさらっておいで。」

「穏かでない、穏かでない、攫さらうは乱暴だ、私が借りる。」

胡粉に筆洗を注いだのですが。

「画工えかきでないのが口惜くやしいな。」

「……何ですか蘭竹なんぞ。あなたの目は徹とおりました、女の乳というものだけでも、これ

から、きつと立派な文章にかけるんです。」

——以来、乳とかく時は一字だけでも胡粉がいい——

と咄嗟とつさに思つて、手首に重く、脈にこたえて、筆で染めると、解けた胡粉は、ほんのりと、笠よりも掌てに響き、雪を円く、暖かく、肌理きめ滑らかに装もり上あがる。色の白さが夜の陽かげろ炎う。

「ああ、ああ、刺ほり青ものツて、こんなでしようか。」

居まずまいの乱ばるる膚はだに、紅くれの点ない滴したは、血ちでない、螢あの首でした。が、筆は我わながら刀メスより鋭とく、双ふたの乳房ちちを、驚す破わ切落きしたように、立たてていた片膝かたひざなり、思おもわず、と尻しつぽもちを支たいだ。

お洲美しづみさんは、うつとり目を開あき、膝ひざを這すって、蹴き出しを隠かくした菅笠かやがさに、両ふたの白しろいものを視みて、擦くつたそうに、ソツと撫なでて、

「……熱あついわ——この乳ちちも酔よっている……」

と、いつて寂さびしく微笑ほほえんだ。

「人目ひとめがあります。これでは巡礼じゆりして、肌かわを曝さらしては、あるかれませぬ。ぼつちり薄紅うすべにを引きましようか、……まあ、それだと、乳首ちちうぶに見えようも知れませぬ。」

浅葱あさぎの絵の具を取つて、線を入れた。白雪の乳房に青い静脈うねは畝うねらないで、うすく輪取つて、双の大輪の朝顔が、面影を、ぱつと咲いた。

蔓つるを引いて、葉を添えた。

「うまいなあ、大野木夫人。」

「知らない。——このくらいな絵は学校で習います。同行どうぎようにん二人——あとは、あなた書いて下さいな。」

「御意のままです、畏かしこまつた。」

「薄墨だし……字は余りうまくないのね。」

「弘法様じゃあるまいし、巡礼の笠に、名筆が要りますか。」

「頂かぶくわ、頂かぶきますわ。」

と、被かぶろうとする。

「お、お待ち下さい。——二階が余り静しずかです。気障きざをいうようだが……その上になお、お髪ぐしが乱れる。」

「可いや厭やな、そんな事は、おいらんに。」

「ああ、坊主になります。」

首を縮めた。

「ちようどいい、坊主が被^{かぶ}つて見せましょう。」

と、魔がさしたように、いや、仏が導くように、笠を被ると、笠の下で、笠を被った、笠の男が、笠を被つて、ひとりでに、ぶらぶらと歩^{ある}行き出したのです。

中の室^まから、玄関へ、式台へ、土間へ、格子へ。

ハツと思わず気が着いたが、

「お洲美さん、貰^ゆつて行きます。」

我知らず声が出ました。

「あれ、奥様。」

女中が飛出す。

お洲美さんは、式台に一段躓^{つま}きながら、襖^{つま}を投げて、障子の棧^{すが}に縋^{すが}つたのでした。

ぶつぶつと、我とも分かず、口の裡^{うち}で、何とも知らず、覚えただけの経文^{つぶや}を呟^{つぶ}き呟^やき、鶯谷から、上野の山中を徜徉^{さまよ}つて歩^{ある}行いた果^{はて}が、夜ふけに、清水の舞台に上った。そうして、朱の扉の端に片よせて、紅緒^{べにお}をわがね、なし得る布施を包んだ手帖^{ノオト}の引きほぐしに、

大慈のお ん心にまかせ三界迷離の笠^{いちがい}一蓋

よしなにおん計はから いのほど 奉ねがいあげたてまつり願まつり上そうろう候

……夜よ

巡礼者

当御堂 お執事中

礼拝

舞台を下りると、いつか緒の解けたのが、血のように絡まつわって、生首を切つて来たように見えます。秋雨がざつと降つて来る。……震え、震え、段を戻つて、もう一度巻込んで、それから、ひた走りに、駆出しましたが。

お洲美さんは——水木藻蝶の年も待たず、三年めに、産後で儂はかなくなりました。

「その紅緒なんです。その朝顔の笠、その面影なんです。——」

八

「——お絹さん、宿へ行つて話しましょう。——この笠に、深いわけがあるんですから。」

「そしたら、泊っておくれやすえ、可こ恐おそいよつて。」

「大きに。」

お洲美さんの思出のために、目の前の誘惑に対する余裕が出来て、と、軽く受けて、
 …我ながらちよつと男振を上げながら、夜露も身に沁しむ、袖で笠を抱きました。

「旦那、帰つてもいいんでござんしよう。」

藍川館の玄関へ引込んだ時、酔つた車夫がニヤニヤと声を掛けた。

「ほんに。」

「いや、一台は、そのまま。幌ほろは掛けたまま頼むよ。」

笠を預けて出たんです。が、今おもつても、冷汗が流れます。この俵くろまをかえしていたら、
 何の面目があつて、世にお目に掛かられよう。

見て下さい。——曲りくねつた長い廊下を、そうでしょう、すぐ外は線路だという、奥
 の奥座敷へ通つて、ほとんど秘密室とも思われる。中は広いのに、ただ狭い一枚襖いちまいぶすまを
 開けると、どうです。歓喜天の厨子ずしかと思う、綾あや錦にしきを積んだ堆うずたかい夜具に、ふつくりと
 埋うずまつて、暖かさに乗出して、仰向けあおむに寝ていたのが、

「やあ。」

という、

枕が二つ。……

「これはおいでなさい。」

眉の青い路之助が、八反たんの広袖どてらに、桃色の伊達巻だてまきで、むくりと起きて出たんですから。

「遅いので、何のおもてなしも。……さ、さ、蜜柑でも。」

片寄せた長火鉢の横で、蜜柑の皮、筋を除ると、懐紙ふところがみの薄いのが、しかし、蜘蛛の巣のように見えた。

「———そうですか、いずれ明日。———お供を……」

「いや、待たせてあります。」

路之助は、式台に、色白くその伊達巻で立った。

お絹ひさしが廂くるまを出て、俵すの輪に摺り寄った処を、

「握手をしますよ。」

半身を幌ほろから覗のぞくと、

「は、は、は、どうぞしつかり。」

「さようなら。」

「お静かに。」

「ああ、お洲美さん。」

万一、前刻さきに御堂の縁で、唇を寄せたらば、恥辱にに活いきてはいられまい。――

「お洲美さん、全く、お庇かげだ。お洲美さん。」

「旦那、どうか、なさいましたか、旦那。」

「うむ。」

踏切の坂を引ひきあげて、寛永寺横手の暗夜やみに、石燈籠に囲まれつつ、轍わだちが落葉にに軋きんだ時、

車夫くるまやが振向むいた。

「婦おんなの友だちだよ。」

「旦那。」

車夫は、藍川館まで附絡つきまとった、美しいのに遁にげられた、色情狂いろきちがいだと思おもつたろう。：

：

「うつくしい、儂はかない人だよ。私の傍そばに居いるようだ。」

「ぎゃあ。」

「ついでにおろしておくれ、山の中を巡礼がしたくなつた。」

「降り出しましたぜ、旦那。」

「野宿をするのに、雨なんぞ。……あなたは濡らさない、お洲美さん。」

「わあ、大きな燈籠の中に青い顔が、ぎやあ。」

俵を棄てた。

術をもつて対すれば、俳優何するものぞ。ただしその頃は、私に台本、戯曲を綴る気があつた。ふと、演出にあたつて、劇中の立女形たておやまに扮するものを、路之助として、技の意見、相背き、相衝突あいついて反する時、「ふん、おれの情婦いろともしらないで。……何、人情がわかるものか。」と侮蔑されたら何とする?!……

「ああ、お洲美さん、ありがとう。」

と朝顔の笠を両袖で——外套は宿へ忘れて来た——袖でひしと抱いて、桜を誘う雨ながら、ざつと一しきり降り来る中に、怪しき巨人に襲われる、森の恐怖にふるえつつも、さめざめと涙を流した、石燈籠が泣くように。……

昭和七（一九三二）年四月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成⁸」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年5月23日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十三卷」岩波書店

1942（昭和17）年6月22日発行

初出：「週刊朝日 第二十一ノ十六号（春季特別號）」

1932（昭和7）年4月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2011年10月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

白花の朝顔

泉鏡花

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>